

## 漢和辞書における江・宕摂韻字音規定の問題点\*

白惠英\*\*・李京哲\*\*\*

## 〈 Abstract 〉

On the *Kana* Notions of the *Jiang* and *Dang* Groups  
in Sino-Japanese Dictionaries

This paper discusses the Sino-Japanese *Kana* notion of characters that belong to the *Jiang*(江) and *Dang*(宕) groups among 2,136 new common Sino-Japanese characters(2010) in six Sino-Japanese dictionaries, and the following conclusions were drawn.

1)The second rhyme *Jiang*(江) appears as an -au/-aku type and -ou/-oku type in *Go'on*. Accordingly, there are many mistakes in the *Kana* notions of *Go'on* in many dictionaries and the -ou/-oku type was described as a *Kan'yō'on* in some dictionaries.

2)The first rhyme *Dang*(唐) appears as an -au/-aku type in both *Go'on* and *Kan'on*. But, its *Go'on* was described as a -jau/-jaku type in some dictionaries.

3)The B type(containing medial i) of the third rhyme *Yang*(陽) appears as an -au/-aku type in *Go'on* and appears as a -jau/-jaku type in *Kan'on*. But, two types appear in both *Go'on* and *Kan'on* due to palatalization of consonants [s] and [z] in Japanese. Accordingly, there are many mistakes in *Kana* notions in many dictionaries.

4)The A type(containing medial i) of the third rhyme *Yang*(陽) appears as a -jau/-jaku type in both *Go'on* and *Kan'on*. But, it appears as an -au/-aku type with the consonants of [n], [l], [s], [z]. This -au/-aku type is an old *Kana* notion of transfer that settled as a Japanese phoneme. Accordingly, the third rhyme *Yang*(陽) can be as a -jau/-jaku type in both *Go'on* and *Kan'on*, and only those remaining as an -au/-aku type until now can be prescribe as a *Go'on*.

5)The rounded syllable(containing medial w) of the third rhyme *Yang*(陽) appears as a -wau/-waku type in *Go'on* and appears as a -wijau/-wijaku type in *Kan'on*. But, the old type of *Kan'on* was recorded as a -jau/-jaku type in every dictionary and the old type of *Go'on* was recorded as an -au/-aku type in some dictionaries.

Field : Phonology

Keywords : Sino-Japanese dictionaries, Sino-Japanese *Kan'on*, Sino-Japanese *Go'on*, Group *Jiang*,  
Group *Dang*

\* This work was supported by the National Research Foundation of Korea Grant funded by the Korean Government(NRF-2013S1A5A2A03045205)

\*\* 東国大学校(seoul campus) 大学院修了、日本語音韻論

\*\*\* 東国大学校(seoul campus) 日語日文学科 教授、日本語音韻論、交信著者

## 1. 序論

現在、日本で出刊されている漢和辞書には、辞書ごとに同じ漢字に対する字音規定が異なったり、字音形そのものが異なったりするなど、色んな問題点が現れる。中沢信幸(2000)は、漢和辞書の編纂において、旧韻書等に拠る演義的解釈によって色んな問題点が現れていると指摘しており、最近、沼本克明(2014)も、全ての漢字の字音註に対する徹底した帰納的研究結果を反映できなかった限界に因って多くの辞書で字音仮名遣いに数多くの問題点を抱えていると指摘している。

また、常用漢字に対する字音分類は佐藤喜代治編(1996)の『漢字百科大事典』の載っている「常用漢字人名用漢字の漢音吳音対照表」が唯一であるが、李京哲・白惠英(2015a)では、この分類表も他の漢和辞書のように色んな問題点が現れることを指摘している。

このような問題点を克服する作業の一環として、李京哲・白惠英(2015b、2015c)及び白惠英・李京哲(2015a、2015b、2016a、2016b、2016c、2016d、2016e)を通じて、各韻別に、漢和辞書における字音形及び系統分類の問題点について考察してきた。

本稿では、漢和辞書における江・宕摂韻に絞って、その字音形及び系統分類にどのような問題点が現れるかを考察する。調査対象は、2010年に改定された常用漢字2,136字の中で訓のみで読まれる字と国字を除いた2,059字の中で、臻摂韻に該当する漢字に限る。調査対象は、出版社の規模、収録漢字数、字音分類の与否等を考慮して、次のような漢和辞書6種に限る<sup>1)</sup>。

諸橋轍次(1986)『大漢和辞典』大修館書店  
 竹田晃・坂梨隆三(1997)『漢和辞典』講談社  
 鎌田正・米山寅太郎(2002)『漢語新辞書』大修館書店  
 長沢規矩也・原田種成・戸川芳郎(2003)『新明解漢和辞典』三省堂  
 小林信明(2012)『新選漢和辞典』小学館  
 藤堂明保・松本昭・竹田晃・加納喜光(2012)『漢字源』学研教育出版

上記の漢和辞書から江・宕摂韻に該当する常用漢字表の字音を全て抽出して、各辞書別に吳音、漢音、慣用音を〈表〉にまとめる。この〈表〉をもとに、各辞書ごとに字音形及び系統分類の異なるものを中心に吳音漢音資料を通じて、どの辞書の字音規定が正しいのかその正誤を明らかにする。字音形の検証に使用した吳音及び漢音の古文献は次のようである。

吳音資料：法華經、般若波羅蜜多經、新訳華嚴經、光明真言、承暦音義、類聚名義抄<sup>2)</sup>  
 漢音資料：佛母大孔雀明王經、文鏡秘府論、蒙求、群書治要、三蔵法師伝、本朝文料<sup>3)</sup>

1) 大漢和辞典の場合、日本で出刊されている一番膨大な規模の辞書であるのでこれを調査対象に入れた。

2) 宋在漢(2012)の分韻表を使う。但し、史的变化及び明らかな漢音の混入は除く。

3) 佛母大孔雀明王經は李京哲(2005b)の分韻表を、文鏡秘府論は柏谷嘉弘(1965)の字音点を、その他の資料は佐々木勇(2009)の分韻表を使う。

## 2. 本論

## 2-1 開口2等江韻の吳音規定

〈表1〉 漢和辞書における江韻に対する字音規定

漢字	辞書	漢音	吳音	慣用音	声韻	
1江	大修館	コウ(カウ)	コウ(カウ)	ゴウ(ガウ)	見江開2	
	三省堂	コウ(カウ)	コウ(カウ)			
	小学館	コウ(カウ)	コウ(カウ)	ゴウ(ガウ)		
	学研	コウ(カウ)	<b>コウ</b> <sup>4)</sup>			
	講談社	コウ(カウ)		ゴウ(ガウ)		
	大漢和	カウ	カウ	ガウ		
2降	大修館	コウ(カウ)	コウ(カウ)		見江開2 匣江開2	
		コウ(カウ)	ゴウ(ガウ)			
	三省堂	コウ(カウ)		ゴウ(ガウ)		
	小学館	コウ(カウ)	<b>ゴウ(ガウ)</b>			
		コウ(カウ)	ゴウ(ガウ)			
	学研	コウ(カウ)	<b>ゴウ</b>			
		コウ(カウ)	<b>ゴウ</b>			
	講談社	コウ(カウ)	コウ(カウ)			
コウ(カウ)		ゴウ(ガウ)				
3港	大修館	コウ(カウ)	コウ(カウ)		見江開2	
		コウ(カウ)	コウ(カウ)			
	三省堂	コウ(カウ)	コウ(カウ)			
	小学館	コウ(カウ)				
	学研	コウ(カウ)	<b>コウ</b>			
	講談社	コウ(カウ)	コウ(カウ)			
大漢和	カウ	カウ				
	カウ	ガウ	ガウ(佛)			
4項	大修館	コウ(カウ)	ゴウ(ガウ)		匣江開2	
	三省堂	コウ(カウ)	ゴウ(ガウ)			
	小学館	コウ(カウ)				
	学研	コウ(カウ)	<b>ゴウ</b>			
	講談社	コウ(カウ)	ゴウ(ガウ)			
	大漢和	カウ	ガウ			
5濯	大修館	タク	ダク		澄覚開2	
	三省堂	タク	ジョク(ヂョク)			
	小学館	タク				
	学研	タク	ダク			
	講談社	タク				
	大漢和	タク	ダク			
6濁	大修館	タク	ダク	ジョク(ヂョク)	澄覚開2	

	三省堂	タク	ジョク(ヂヨク)	ダク	
	小学館	タク	ジョク(ヂヨク)	ダク	
	学研	タク	ダク	ジョク(ヂヨク)	
	講談社	タク	ジョク(ヂヨク)	ダク	
	大漢和	タク	ダク	ヂヨク	
7幢	大修館	ショウ	シュウ	ドウ	澄江開2 穿鍾合3甲
	三省堂	トウ(タウ)	ズウ(ヅウ)	ドウ	
		ショウ	シュ		
	小学館	トウ(タウ)		ドウ	
		ショウ			
	学研	トウ(タウ)	ドウ	ドウ	
		ショウ	シュ		
講談社	ショウ	シュ	ドウ		
大漢和	タウ	ダウ	ドウ		
	ショウ	シュ			
8邦	大修館	ハウ(ハウ)			幫江開2
	三省堂	ハウ(ハウ)	ハウ(ハウ)		
	小学館	ハウ(ハウ)	ハウ(ハウ)		
	学研	ハウ(ハウ)	ハウ		
	講談社	ハウ(ハウ)	ハウ		
	大漢和	ハウ			
9剥	大修館	ハク			幫覚開2
	三省堂	ハク	ハク		
	小学館	ハク	ハク		
	学研	ハク	ホク		
	講談社	ハク			
	大漢和	ハク			
10朴	大修館	ハク		ボク	滂覚開2 滂屋開1
	三省堂	ハク	ハク	ボク	
	小学館	ハク		ボク	
	学研	ホク	ホク	ボク	
	講談社	ハク	ボク		
	大漢和	ハク		ボク	
11棒	大修館	ハウ(ハウ)	ボウ(バウ)		並江開2
	三省堂	ハウ(ハウ)	ボウ(バウ)		
	小学館	ハウ(ハウ)	ボウ(バウ)		
	学研	ハウ(ハウ)	ボウ(バウ)		
	講談社	ハウ(ハウ)	ボウ(バウ)		
	大漢和	ハウ	バウ	ボウ	
12捉	大修館	サク		ソク	莊覚開2
	三省堂	サク		ソク	
	小学館	サク		ソク	
	学研	サク		ソク	
	講談社	サク	ソク		
	大漢和	サク		ソク	
13窓	大修館	ソウ(サウ)			初江開2
	三省堂	ソウ(サウ)	ソウ(サウ)		

	小学館	ソウ(サウ)	ソウ	
	学研	ソウ(サウ)	ソウ	
	講談社	ソウ(サウ)		
	大漢和	サウ		

上の〈表1〉のように、各辞書ごとに開口2等江韻の字音形に違いが見られる。多くの辞書で開口2等江韻に対して、漢音の場合、陽声字は-au)-ou形で、入声字は-aku形で、一律的に記載している。但し、呉音の場合は、多くの辞書で陽声字は-au)-ou形で、入声字は-aku形と記載しているが、一部-ou/-oku形を混用している。特に、-ou/-oku形を慣用音に規定している場合も見える。

では、呉音の古文獻を通じて、開口2等江韻がどのような字音形で出現するのか調べてみよう。

〈表2〉 開口2等江韻の呉音形

声母	法華経	般若経	華嚴経	光明真言	承暦音義	名義抄
見k	カウ江講 カク角覚	カウ江 カク角	カク角	カウ講 カク覚	カウ江	カウ講
疑ŋ	カク樂岳	カク樂	カク樂			
影ʔ	アク握		アク幄			
曉h			コク穀			
匣ɦ	カウ降項巷 項コウ カク學	カウ降巷	カウ項			
知tʰ		タク啄 トク啄				タク斲
澄d	トウ幢 タク濁	トウ撞撞	タク濯濯		トウ幢	
幫p	ハク爆爆 ホク爆	ハク爆	ハク剝			
滂pʰ	ホク撲 ハク撲					
並b	ハク雹		ハウ蚌			ハク雹
莊ʃ		シヤク捉				サク捉
照tɕ	シヤク促					
初tʰ	ソウ窓 サウ窓		ソウ窓			ソウ窓
山ʃ	サク數	サウ雙 サク稍 ソク數	ソク數			ソク數

上の〈表2〉のように、開口2等江韻は呉音の場合も、漢音と同じように、-au/-aku形が主流を成してい

4) 問題になる字音を太い字で現わした。

る。但し、[設コク、項コウ、啄トク、幢撞幢トウ、爆撲ホク、數ソク]のように、-ou/-oku形が混在している。このような呉音における主母音oの反映の存在から、B. Karlgren(1954)以後、多くの学者が江韻の主母音をɔに再構している<sup>5)</sup>。しかし、平山久雄(1982:137-138)はKarlgrén(1954)が再構したɔは江韻以外には存在しないことを指摘し、江韻にも他の2等韻と同じように、牙喉音声母の口蓋化が早く発生するなどの江韻を巡った音韻史上の現象を説明するためには、江韻を-awŋ/-awkに推定するのが望ましいと主張<sup>6)</sup>し、李京哲(2003:169-170)では、江韻が南北朝時代に、-auŋ/-aukから合口介音uを脱落させて、既に南北朝時代に-aŋ/-akに変わっている可能性が高いと述べている。呉音資料で-ou/-oku形で出現する場合より漢音と同形である-au/-aku形で出現する例が多く現れるということは、この主張を裏付けると言えよう。

では、上の呉音資料を基に各辞書に現れる字音規定の問題点を声母別に考察してみよう。

見母[1江]の呉音漢音について、他の辞書では[コウ(カウ)]のように、古形を併記しているが、学研教育では呉音を[コウ]のみで記載している。漢音は[コウ(カウ)]と記載しながら呉音を[コウ]のみで記載すると、その呉音は古形も[コウ]であることを意味するが、上の<表2>のように、呉音資料でも[江]は[カウ]で出現しているので、必ず[コウ(カウ)]とその古形を併記しなければならないであろう。[2降]と[3港]に於いても、学研教育では同じ誤謬が見える。

匣母[4項]の呉音を他の辞書では[ゴウ(ガウ)]のように、古形を併記しているが、学研教育では呉音を[ゴウ]のみで記載している。[項]は上の呉音資料から[カウ]の字音註が見られるので、その呉音は[ゴウ(ガウ)]に規定すべきであろう。

澄母[5濯]の呉音を他の辞書では[ダク]と記載しているが、三省堂のみで[ジョク(ヂョク)]と記載しており、[6濁]の呉音も辞書によって[ダク]と[ジョク(ヂョク)]に分けられ、呉音を[ジョク(ヂョク)]と記載している辞書では現音[ダク]を慣用音に規定している。しかし、上の呉音資料から-joku形は見つからず、法華経で[濁タク]の字音註が見られるので、[5濯6濁]の呉音は[ダク]に規定すべきであろう。

澄母[7幢]は江韻以外にと鍾韻にも属する多音字であるが、[ショウ]は鍾韻の字音を反映したものであり、[ドウ]は上の呉音資料からも[トウ]の字音註が確認できるので江韻を反映した呉音に規定できる。従って、全ての辞書で慣用音に規定してしまった[幢ドウ]は呉音に規定すべきであろう。

幫母[8邦]の呉音について、辞書によって[ホウ(ハウ)]と[ハウ]に分けられ、[9剥]の呉音についても[ハク]と[ホク]に分けられる。[邦]は上の呉音資料からその字音註が見つからないので判断を据え置き、[剥]は[ハク]の字音註が見られるので[剥]の呉音は[ハク]に規定できるであろう。

5) 江韻の再構音は次のようである。

鄭張	K	王力	董	李	李榮	邵	藤堂	平山	P
ɤaŋ/k	ɔŋ/k	ɔŋ/k	ɔŋ/k	ɑŋ/k	ɔŋ/k	ɔŋ/k	ɔŋ/k	awŋ/k	aawŋ/k

学者の氏名は地面関係上、鄭張尙芳は鄭張に、KarlgrénはKに、董同龢は董に、李方桂は李に、邵樂芬は邵に、河野六郎は河野に、藤堂明保は藤に、平山久雄は平山に、PulleyblankはPに略称する。鄭張尙芳・Karlgrén・王力・李榮・邵樂芬は鄭張尙芳(2003:249)、その他は、董同龢(訳書1975:175)、藤堂明保(1957:236)、平山久雄(1967:156)、Pulleyblank(1983:235)、李方桂(1980)による。

6) 平山久雄(1982:138)が再構した江韻-awŋ/-awkは、三根谷徹の-auŋ/-aukに依るが、主母音に円唇性を齎すwu等を加えたのは同じである。

滂母[10朴]は江韻以外に東(屋)韻にも属する多音字であるが、上の表には各辞書の江(覚)韻に属する字音のみを掲載した。調査対象の呉音資料では[穀]の字音註が見つからないので、江(覚)韻の呉音形が[ハク]であるか[ホク]であるかの判断は据え置く。但し、講談社の呉音[ボク]と学研教育の漢音[ホク]は明白な誤謬であろう。

並母[11棒]の呉音はすべての辞書で[ボウ(バウ)]と記載している。上の呉音資料ではその字音註が見つからないが、呉音の古形そのものが[ボウ]である可能性は残る。

莊母[12捉]の[ソク]を他の辞書では慣用音と記載しているが、講談社のみで呉音に規定している。多くの辞書では[ソク]を慣用音に分類したのは聲符[足]の類推音であると判断した故であろう。但し、上の呉音資料で[ソク]の字音註は見つからないが、今までその字音形が残っているので呉音形である可能性があると考えられる。

初母[13窓]の呉音についても辞書によって[ソウ(サウ)]と[ソウ]に分けられるが、上の呉音資料で[窓ソウ]の字音註が多数の資料から見られるので、呉音の古形そのものが[ソウ]であろう。

## 2-2 開口1等唐韻の字音規定

〈表3〉 漢和辞書における唐韻に対する字音規定

漢字	辞書	漢音	呉音	慣用音	声韻
1拓	大修館	タク			透鐸開1 照清開3
		セキ	シヤク		
	三省堂	タク	チャク		
		セキ	シヤク		
	小学館	タク			
		セキ			
	学研	タク	タク		
講談社	タク				
2唐	大修館	タク			定唐開1
		セキ	シヤク		
	三省堂	トウ(タウ)	ドウ(ダウ)		
	小学館	トウ(タウ)	ドウ(ダウ)		
	学研	トウ(タウ)	ドウ(ダウ)		
	講談社	トウ(タウ)	ドウ(ダウ)		
	大漢和	タウ			

上の〈表3〉のように、開口1等唐韻について、多くの辞書で呉音漢音共に-au/-ou/-aku形と記載しており、呉音漢音の古文獻でも同じように現れるので特異な問題点は見つからない。但し、一部の辞書で以下のような問題点が見られる。

[1拓]の[タク]を大修館・大漢和では呉音・漢音同形と記載しているが、三省堂・小学館・講談社では漢音のみで記載しており、特に、三省堂ではその呉音を[チャク]と記載している。[拓]は呉音漢音共に[タク]と記載すべきであろう。

[2唐]は小学館と大漢和で呉音も漢音と同じ[トウ(タウ)]と記載しているが、[唐]は濁字である定母に該当するのでその呉音は[ドウ(ダウ)]に訂正しなければならない。

[3倉シャウ]のような歯音字に於いて、-jau/-jaku形で記載した場合が見られるが、梗摂韻にも属する[薄錯索]のような多音字の場合以外は、呉音からこのような-jau>-jou/-jaku形は除外すべきであろう。

## 2-3 開口3等陽韻乙類の字音規定

〈表4〉 漢和辞書における陽韻乙類に対する字音規定

漢字	辞書	漢音	呉音	慣用音/唐音	声韻
1脚	大修館	キヤク	カク	キヤ(唐)	見薬開3乙
	三省堂	キヤク	カク	【キヤ】	
	小学館	キヤク	カク	キヤ(慣)	
	学研	キヤク	カク	キヤ(唐)	
	講談社	キヤク	カク	キヤ(唐)	
	大漢和	キヤク	カク		
2虐	大修館	ギヤク	ガク		疑薬開3乙
	三省堂	ギヤク	ギヤク		
	小学館	ギヤク			
	学研	ギヤク	ギヤク		
	講談社	ギヤク			
	大漢和	ギヤク	ガク		
3約	大修館	ヤク	アク		影薬開3乙
	三省堂	ヤク	ヤク		
	小学館	ヤク	ヤク		
	学研	ヤク	ヤク		
	講談社	ヤク	ヤク		
	大漢和	ヤク	アク		
4倉	大修館	ソウ(サウ)			清陽開3乙
	三省堂	ソウ(サウ)	ソウ(サウ)		
	小学館	ソウ(サウ)	ソウ(サウ)		
	学研	ソウ(サウ)	ソウ(サウ)		
	講談社	ソウ(サウ)	ソウ(サウ)		
	大漢和	サウ			
5創	大修館	ショウ(シャウ)	ソウ(サウ)		初陽開3乙
	三省堂	ソウ(サウ)	ショウ(シャウ)		
	小学館	ソウ(サウ)	ソウ(サウ)		
	学研	ソウ(サウ)	ショウ(シャウ)		
	講談社		ソウ(サウ)		
	大漢和	サウ	シャウ		
6粧	大修館	ショウ(シャウ)	ショウ(シャウ)		莊陽開3乙
	三省堂	ショウ(シャウ)	ショウ(シャウ)		
	小学館	ソウ(サウ)	ショウ(シャウ)		

	学研	ソウ(サウ)	ショウ(シヤウ)		
	講談社	ソウ(サウ)	ショウ(シヤウ)		
	大漢和	サウ	シヤウ		
7仕	大修館	ショウ(シヤウ)	ソウ(サウ)		莊陽開3乙
	三省堂	ソウ(サウ)	ショウ(シヤウ)		
	小学館	ソウ(サウ)	ショウ(シヤウ)		
	学研	ソウ(サウ)	ショウ(シヤウ)		
	講談社	ソウ(サウ)			
	大漢和	サウ	シヤウ		
8荘	大修館	ショウ(シヤウ)	ソウ(サウ)		莊陽開3乙
	三省堂	ソウ(サウ)	ショウ(シヤウ)		
	小学館	ソウ(サウ)	ショウ(シヤウ)		
	学研	ソウ(サウ)	ショウ(シヤウ)		
	講談社	ソウ(サウ)	ショウ(シヤウ)		
	大漢和	サウ	シヤウ		
9爽	大修館	ソウ(サウ)	ショウ(シヤウ)		莊陽開3乙
	三省堂	ソウ(サウ)	ショウ(シヤウ)		
	小学館	ソウ(サウ)			
	学研	ソウ(サウ)	ショウ(シヤウ)		
	講談社	ソウ(サウ)	ソウ(サウ)		
	大漢和	サウ	シヤウ		
10床	大修館	ショウ(シヤウ)	ジョウ(ジャウ)		牀陽開3乙
	三省堂	ショウ(シヤウ)	ゾウ(ザウ)		
	小学館	ソウ(サウ)	ショウ(シヤウ)		
	学研	ソウ(サウ)	ジョウ(ジャウ)	ショウ(シヤウ)	
	講談社	ソウ(サウ)	ショウ(シヤウ)		
	大漢和	サウ	ジャウ	シヤウ	
11状	大修館	ショウ(シヤウ)	ジョウ(ジャウ)		牀陽開3乙
	三省堂	ソウ(サウ)	ジョウ(ジャウ)		
	小学館	ソウ(サウ)	ジョウ(ジャウ)		
	学研	ソウ(サウ)	ジョウ(ジャウ)		
	講談社		ジョウ(ジャウ)		
	大漢和	サウ	ジャウ		
12霜	大修館	ショウ(シヤウ)	ソウ(サウ)		心陽開3乙
	三省堂	ソウ(サウ)	ショウ(シヤウ)		
	小学館	ソウ(サウ)			
	学研	ソウ(サウ)	ショウ(シヤウ)		
	講談社	ソウ(サウ)			
	大漢和	サウ	シヤウ		

上の〈表3〉のように、多くの辞書で、漢音の場合、牙喉音字は-jau/-jaku形と記載しているが、歯音字は-jau/-jaku形と-au/-aku形で辞書ごとに異なる。呉音の場合も、牙喉音字は-au/-aku形と記載しているが、歯音字は-jau/-jaku形と-au/-aku形で辞書ごとに異なる。このように、歯音字の字音規定に辞書ごとに大きな違いが見える。

では、呉音漢音の古文献では開口3等陽韻乙類がどのような字音形で出現するのか調べてみよう。

〈表5〉 開口3等陽韻乙類の吳音形

声母	法華經	般若經	華嚴經	光明真言	承暦音義	名義抄
見k	カク脚					カウ僵壇疆 カク脚
溪kʰ	カウ蜣					
群g	カウ強	カウ強				カウ強
疑ŋ	カウ仰	カウ仰	カウ仰	カウ仰		カウ仰
影ʔ	アウ殃央鶯	アウ殃鶯	アウ鞅			
曉h	カウ香郷響 向	カウ響	カウ香響	カウ香向		カウ香郷向
初tʰ	サウ瘡創	サウ瘡	サウ瘡			サウ瘡
牀ɕ	シヤウ牀床 狀	シヤウ床狀	シヤウ牀	シヤウ狀		
山ʃ	サウ霜	サウ霜				

〈表6〉 開口3等陽韻乙類の漢音形

声母	蒙求	群書治要	三藏法師伝	本朝文粹	孔雀經	文鏡秘府論
見k	キヤウ姜	キヤウ襁	キヤウ壇	キヤク脚		キヤウ姜
溪kʰ	キヤク却		キヤク却	キヤク却		
群g)kʰ	キヤウ強疆	キヤウ疆	キヤウ強疆	キヤウ強疆		
疑ŋ)ⁿg	キヤウ仰 キヤク虐	キヤウ仰 キヤク虐	キヤウ仰	キヤウ仰 キヤク虐	キヤク虐	
影ʔ	ヤウ鞅 ヤク約 エキ約	ヤウ殃鞅		ヤウ殃 エキ約		ヤウ鞅 ヤク約 エキ約
曉h	キヤウ香向	キヤウ郷享 響向	ケイ響郷	キヤウ郷響 向	キヤウ香響 向 ケイ響	
莊tʃ)tc	サウ莊装 シヤウ莊装 サク断 シヤク断	サウ莊 シヤウ壯	サウ莊壯 シヤウ莊装	シヤウ装 サウ壯	サウ粧壯 シヤウ粧壯	サウ壯 シヤウ莊
初tʰ)tcʰ				サウ瘡	サウ瘡	
牀ɕ)c	サウ床 シヤウ床		サウ狀 シヤウ狀	シヤウ床	サウ狀 シヤウ狀	サウ狀
山ʃ)c	サウ霜爽	サウ爽槍	サウ爽	サウ孀爽		

上の〈表5〉のように、開口3等陽韻乙類は吳音で主に-au/-aku形で出現するが、齒音字のみで-jau/-jaku形が混在している。また、〈表6〉のように、漢音では主に-au/-aku形で出現するが、齒音字のみで-jau/-jaku形が混在している。

では、上の古文献に基に各辞書で見える開口3等陽韻乙類の字音規定に対する問題点を調べてみよう。

[1脚]の[キヤ]について、他の辞書では唐音に規定しているが、小学館では慣用音に規定している。また、三省堂では『 』を使って慣用音・唐音及びその他の特殊な字音形であることを表している<sup>7)</sup>。まず、三省堂では慣用音と唐音を明らかに区分する必要があるが、[脚キヤ]は管見の唐音資料でその字音註は見るからないが、[却キヤ]<sup>8)</sup>等を通じて類推でき、現在も[行脚アンギヤ]等の漢語に残っているので唐音であることが立証される。

[2虐]の呉音を他の辞書では[ガク]と記載しているが、三省堂と学研教育では漢音と同形である[ギヤク]と記載している。呉音で牙喉音字は-au/-aku形で出現するので[虐]の呉音は[ガク]に規定できる。

[3約]の呉音を大修館と大漢和のみで[アク]で、他の辞書では漢音と同形である[ヤク]と記載している。呉音資料で[アク]の字音註は見つからないが、呉音で牙喉音字は-au/-aku形で出現するので、その呉音は[アク]である可能性が高い。

歯音字に該当する[4倉]から[11霜]までは辞書ごとに漢音も呉音も-au形と-jau形を混用しており、辞書ごとに異なる。これは日本語のサ行子音の口蓋性に因るものと考えられるが、とにかく、呉音漢音の古文獻でも同じように二つの字音形が混在するので、その字音を規定するのは難しい。但し、濁字の場合はその声母の反映を通じて呉音漢音が区別でき、その他は牙喉音字のように、呉音を-au形に、漢音を-jau形に規定すればいいであろう。従って、漢音/呉音の順に歯音字の字音を規定すると、[4倉 ショウ/ソウ]、[5創 ショウ/ソウ]、[6粧 ショウ/ソウ]、[7壮 ショウ/ソウ]、[8莊 ショウ/ソウ]、[9爽 ショウ/ソウ]、[10床 ショウ/ゾウ]、[11状 ショウ/ジョウ]、[12霜 ショウ/ソウ]にまとめられる。

## 2-4 開口3等陽韻甲類の字音規定

〈表7〉 漢和辞書における陽韻甲類に対する字音規定

漢字	辞書	漢音	呉音	慣用音	声韻
1嬢	大修館	ジョウ(ヂャウ)	ニョウ(ニャウ)		娘陽開3甲
	三省堂	ジョウ(ヂャウ)	ノウ(ナウ)		
	小学館	ジョウ(ヂャウ)			
	学研	ジョウ(ヂャウ)	ニョウ(ニャウ)		
	講談社	ジョウ(ヂャウ)			
	大漢和	ヂャウ	ニャウ		
2良	大修館	リョウ(リャウ)	リョウ(リャウ)		来陽開3甲
	三省堂	リョウ(リャウ)	リョウ(リャウ)		
	小学館	リョウ(リャウ)	ロウ(ラウ)		
	学研	リョウ(リャウ)	ロウ(ラウ)		
	講談社	リョウ(リャウ)	ロウ(ラウ)		
	大漢和		リャウ		
3涼	大修館	リョウ(リャウ)	リョウ(リャウ)		来陽開3甲

7) 三省堂(2003:13)では『 』を転化した音訓に使用すると記しているが、慣用音・唐音及びその他の特殊な字音形に使っている。

8) 沼本克明(1997:601)を参照されたい。その他、「着シヤ・ジャ、薬ヤ、略リヤ」などが見られる。

	三省堂	リョウ(リャウ)	リョウ(リャウ)		
	小学館	リョウ(リャウ)	リョウ(リャウ)		
	学研	リョウ(リャウ)	ロウ(ラウ)		
	講談社	リョウ(リャウ)			
	大漢和	リャウ			
4量	大修館	リョウ(リャウ)	リョウ(リャウ)		来陽開3甲
	三省堂	リョウ(リャウ)	リョウ(リャウ)		
	小学館	リョウ(リャウ)	リョウ(リャウ)		
	学研	リョウ(リャウ)	ロウ(ラウ)		
	講談社	リョウ(リャウ)	リョウ(リャウ)		
大漢和	リャウ				
5糧	大修館	リョウ(リャウ)	リョウ(リャウ)	ロウ(ラウ)	来陽開3甲
	三省堂	リョウ(リャウ)	リョウ(リャウ)	ロウ(ラウ)	
	小学館	リョウ(リャウ)	ロウ(ラウ)		
	学研	リョウ(リャウ)	ロウ(ラウ)		
	講談社	リョウ(リャウ)	ロウ(ラウ)		
大漢和	リャウ				
6略	大修館	リャク	リャク		来葉開3甲
	三省堂	リャク	リャク		
	小学館	リャク	リャク		
	学研	リャク	ラク		
	講談社	リャク	リャク		
大漢和	リャク				
7将	大修館	ショウ(シャウ)	ソウ(サウ)		精陽開3甲
	三省堂	ショウ(シャウ)	ソウ(サウ)		
	小学館	ショウ(シャウ)	ショウ(シャウ)		
	学研	ショウ(シャウ)	ソウ(サウ)		
	講談社	ショウ(シャウ)	ソウ(サウ)		
大漢和	シャウ	サウ			
8爵	大修館	シャク	サク	ジャク	精陽開3甲
	三省堂	シャク	サク		
	小学館	シャク	シャク		
	学研	シャク	サク		
	講談社	シャク			
大漢和	シャク	サク			
9彰	大修館	ショウ(シャウ)			照陽開3甲
	三省堂	ショウ(シャウ)	ショウ(シャウ)		
	小学館	ショウ(シャウ)			
	学研	ショウ(シャウ)	ショウ(シャウ)		
	講談社	ショウ(シャウ)	ソウ(サウ)		
大漢和	シャウ				
10祥	大修館	ショウ(シャウ)	ゾウ(ザウ)		邪陽開3甲
	三省堂	ショウ(シャウ)	ジョウ(ジャウ)		
	小学館	ショウ(シャウ)			
	学研	ショウ(シャウ)	ゾウ(ザウ)		
	講談社	ショウ(シャウ)			
大漢和	シャウ	ザウ			

11詳	大修館	シヨウ(シャウ)	ゾウ(ザウ)		邪陽開3甲
	三省堂	シヨウ(シャウ)	ゾウ(ザウ)		
	小学館	シヨウ(シャウ)	ジョウ(ジャウ)		
	学研	シヨウ(シャウ)	ゾウ(ザウ)		
	講談社	シヨウ(シャウ)			
	大漢和	シヤウ	ザウ		
12償	大修館	シヨウ(シャウ)	ジョウ(ジャウ)		禪陽開3甲
	三省堂	シヨウ(シャウ)	ジョウ(ジャウ)		
	小学館	シヨウ(シャウ)	シヨウ(シャウ)		
	学研	シヨウ(シャウ)	ジョウ(ジャウ)		
	講談社	シヨウ(シャウ)			
	大漢和	シヤウ	ジャウ		

上の〈表7〉のように、多くの辞書で、開口3等陽韻甲類は漢音吳音共に概ね-jou(-jau)/-jaku形と記載しているが、その吳音の歯音字と来母字を中心に陽声韻は-ou(-au)形と記載しているのは場合が見える。

開口3等陽韻甲類は吳音でも漢音のように、-jau/-jaku形で出現するが、[良娘ラウ、想相箱像象サウ]のように、来母字と歯音字を中心に-au/-aku形が混在している。開口3等甲類韻であるにも関わらず、このような直音形が出現する理由は、歯音字のみで考えると、サ行子音の口蓋性に因るものであるとも考えられるが、来母字であるラ行でも出現するので、拗音表記が日本語に定着しく過程で出現した字音形であると考えられる。

泥母[1嬢]の吳音を三省堂では[ノウ(ナウ)]に、大漢和では[ニヤウ]と[ナウ]を併記しているが、上の吳音資料ではこの漢字に対する字音註が見つからない。

来母[2良]の吳音を他の辞書では[ロウ(ラウ)]と記載しているが、大修館・三省堂・大漢和では漢音と同形である[リョウ(リャウ)]と記載しており、大漢和では[ロウ(ラウ)]と[リョウ(リャウ)]を併記している。上の吳音資料からも法華経に[リャウ]と[ラウ]の二つの字音註が共に現れるが、[リャウ]は漢音と同形であり、[ラウ]を吳音資料で確認できるので、[良]の吳音を[ロウ(ラウ)]に規定すべきであろう。

来母[3涼]と[4量]の吳音を他の辞書では[リョウ(リャウ)]と記載しているが、学研教育のみで[ロウ(ラウ)]と記載している。上の吳音資料で[涼][量]共に[リャウ]のみで音註されているので、[涼][量]の吳音は[リョウ(リャウ)]に規定すべきであろう。

来母[5糧]に対する吳音規定も辞書によって[リョウ(リャウ)]と[ロウ(ラウ)]に分けられるが、[リョウ(リャウ)]を吳音に規定した大修館と三省堂では[ロウ(ラウ)]を慣用音に規定している。上の吳音資料では[糧]が[リャウ]のみで音註されているが、現在[ロウ(ラウ)]という字音が残っているので、これは拗音表記が定着する以前の吳音と規定すべきであろう。

来母[6略]の吳音も他の辞書では漢音と同形である[リャク]と記載しているが、学研教育のみで[ラク]と記載している。しかし、上の吳音資料で[略]は[リャク]のみで出現するので、[略]の吳音は[リャク]に規定すべきであろう。

歯音字で[7将]の吳音を小学館は漢音と同形である[シヨウ(シャウ)]と記載しているが、他の辞書では[ソウ(サウ)]と記載している。[8爵]の吳音も小学館は漢音と同形である[シャク]と記載しているが、他の辞書では[サク]と記載している。又、[9彰]の吳音も他の辞書では[シヨウ(シャウ)]と記載している

が、講談社では[ソウ(サウ)]と記載している。上の呉音資料からも[想相箱像象サウ]のような直音表記を見出せるが、これはサ行子音の口蓋性及び拗音表記の未定着によるもので、現在、[ソウゾウサクザク]という字音形が残っているもののみを呉音に規定し、その他は全て呉音漢音同形である-jau/-jaku形で規定すべきであろう。従って、[10祥][11詳]の呉音は[ジョウ(ジャウ)]に規定すべきであり、[12償]の呉音を他の辞書では[ジョウ(ジャウ)]と記載し、小学館のみで[ショウ(シャウ)]と記載しているが、これは禪母字であるので、声母から見て、その呉音は[ジョウ(ジャウ)]に規定すべきであろう。

## 2-5 合口3等陽韻の字音規定

〈表8〉 漢和辞書における合口3等陽韻に対する字音規定

漢字	辞書	漢音	呉音	慣用音	声韻
1狂	大修館	キョウ(キヤウ)	ゴウ(グワウ)		群陽合3乙
	三省堂	キョウ(キヤウ)	ゴウ(ガウ)		
	小学館	キョウ(キヤウ)		オウ(ワウ)	
	学研	キョウ(キヤウ)	ゴウ(グワウ)		
	講談社	キョウ(キヤウ)			
	大漢和	キヤウ	グワウ		
2況	大修館	キョウ(キヤウ)	コウ(クワウ)		曉陽合3乙
	三省堂	キョウ(キヤウ)	コウ(カウ)		
	小学館	キョウ(キヤウ)	キョウ(キヤウ)		
	学研	キョウ(キヤウ)	コウ(クワウ)		
	講談社	キョウ(キヤウ)			
	大漢和	キヤウ	クワウ		

上の〈表8〉のように、多くの辞書で開口3等陽韻甲類は漢音呉音共に概ね-jou(-jau)/-jaku形で規定しているが、その呉音については歯音字と来母字を中心に陽声韻を-ou(-au)形で記載している場合が見える。

しかし、漢音資料で牙喉音字は-wijau/-wijaku形で出現しているので、[1狂]の漢音は[キョウ(クキヤウ)]のように、その古形を訂正すべきであろう。また、[1狂]の呉音を三省堂では[ゴウ(ガウ)]と記載しているが、[ゴウ(グワウ)]のように、その古形を訂正すべきであろう。

[2況]についても辞書ごとに同じ誤謬が見られる。[況]の古形を全ての辞書で[キヤウ]と記載しているが、これは[キョウ(クキヤウ)]のように、その古形を訂正しなければならないし、三省堂の呉音 [ゴウ(ガウ)]と小学館の[キョウ(キヤウ)]は[コウ(クワウ)]に訂正すべきであろう。

### 3. 結論

本稿では新常用漢字表における江・宕攝に属する漢字について、漢和辞書6種を対象にその字音規定を考察した。その結果現れた問題点をまとめると、以下のようである。

1) 開口2等江韻は、呉音で-au/-aku形と-ou/-oku形が混在しているので、多くの漢和辞書で呉音形に誤謬が見つかり、また、-ou/-oku形を慣用音に規定している場合も見られる。従って、江韻の呉音形は古文献を通じて一々その字音形を再確認する必要がある、また、-ou/-oku形は慣用音から除かなければならない。

2) 開口1等唐韻は、呉音漢音共に-au/-aku形で出現するが、一部の辞書で呉音を-jau/-jaku形で記載する誤謬が見られる。

3) 開口3等陽韻乙類は、呉音では-au/-aku形で、漢音では-jau/-jaku形で出現するが、歯音字の場合、日本語におけるサ行子音の口蓋性に因り、漢音であれ呉音であれ-au/-aku形と-jau/-jaku形が混在する。これに因る字音規定の難しさから、多くの辞書でその歯音字の字音形に誤謬が見られる。歯音字の中で、濁字の場合はその声母の反映を通じて呉音漢音を区別でき、その他は現在まで残っている字音形を呉音漢音同形で規定すべきであろう。現在、その字音形が残っていない場合は、牙喉音字のように、呉音は-au/-aku形、漢音は-jau/-jaku形に規定すべきであろう。これは陽韻甲類の場合も同じように適用できるであろう。

4) 開口3等陽韻甲類は、呉音漢音共に-jau/-jaku形で出現するが、ナ・ラ・サ・ザ行では直音形である-au/-aku形で出現する場合がある。この直音形は拗音が日本語の音素として定着する以前の字音形であり、古い資料を中心に出現するので、呉音に規定すべきであろう。即ち、開口3等陽韻甲類は、呉音漢音共に-jau/-jaku形で規定すればいいが、現在まで-au/-aku形で残されている字音形のみを呉音に規定すればいいと考えられる。

5) 開口3等陽韻甲類は、漢音では-wijau/-wijaku形で、呉音では-wau/-waku形で出現する。しかし、全ての辞書で漢音の古形を-jau/-jaku形と記載しており、また、呉音の古形を合口性を省いた-au/-aku形と記載している場合も見られる。

#### 【参考文献】

- 김정빈(2007) 「安田八幡宮藏大般若波羅蜜多經分紐分韻表」 『일본오음연구』 책사랑 pp.388-389, pp.485-496
- 白惠英・李京哲(2015a) 「漢和辭典 麻韻字의 字音 規定에 대하여」 『日本研究』 39 中央大學校 日本研究所 pp.59-74
- \_\_\_\_\_ (2015b) 「漢和辭書における梗曾摂韻の字音規定の問題点」 『日本研究』 24 高麗大學校 글로벌 일본연구원 pp.251-272
- \_\_\_\_\_ (2016a) 「漢和辭典 侯韻 字音 규정의 문제점」 『日本學報』 106 韓國日本學會 pp.101- 114.

- \_\_\_\_\_ (2016b) 「漢和辭典 尤韻 字音 규정의 문제점」 『日本近代學研究』 51 韓國日本近代學會 pp.37-53
- \_\_\_\_\_ (2016c) 「漢和辭典 效撰韻 字音 규정의 문제점」 『日語日文學研究』 96 韓國日語日文學會 pp.47-65
- \_\_\_\_\_ (2016d) 「漢和辭典 山撰韻 字音 규정의 문제점」 『동북아문화연구』 46 동북아시아문화학회 pp.323-343
- \_\_\_\_\_ (2016e) 「漢和辭書における臻撰韻の字音規定の問題点」 『日本語教育研究』 35 韓國日語教育學會 pp.147-165
- 宋在漢(2012) 『日本 吳音の韻類體系 研究』 東國大學校 博士學位論文 pp.147-162
- 李京哲(2003) 「中古漢語 韻尾體系의 再考」 『日語日文學研究』 44 韓國日語日文學會 pp.165 -185
- \_\_\_\_\_ (2005) 『佛母大孔雀明王經 字音研究』 책사랑 pp.188-194
- \_\_\_\_\_ (2006) 「한화사전에 나타나는 오음규정의 문제점」 『日本文化研究』 19 동아시아일본학회 pp.367 -384
- 李京哲·白惠英(2009) 「漢和辭典에 나타나는 漢音規定의 문제점」 『日本語文學』 41 韓國日本語文學會 pp.117-130
- \_\_\_\_\_ (2011) 「漢和辭典에 나타나는 唐音規定의 문제점」 『日本言語文化』 19 韓國日本言語文化學會 pp.287-297
- \_\_\_\_\_ (2014) 「漢和辭典 舌內入声韻尾字의 字音規定에 관하여」 『東北亞文化研究』 39 동북아시아문화학회 pp.83-97
- \_\_\_\_\_ (2015a) 「漢和辭典 通撰韻 字音規定의 문제점」 『日本學研究』 45 檀國大學校 日本研究所 pp.239-261
- \_\_\_\_\_ (2015b) 「常用漢字人名用漢字 漢音吳音對照表(1996)의 문제점」 『日本研究』 63 韓國外國語大學校 日本研究所 pp.399-416
- 河素偵(2005) 『上代日本語 借字表記の聲韻學的 研究』 東國大學校 博士學位論文 pp.116-124
- 小倉肇(1995) 『日本吳音の研究 第 I 部 研究篇』 新典社 pp.515-521
- 柏谷嘉弘(1965) 「図書寮本文鏡秘府論字音点」 『国語学』 第六十一集 国語学会 pp.38-39
- 佐々木勇(2009a) 『平安鎌倉時代における日本漢音の研究-資料篇-』 汲古書院 pp.29-31, pp.188-208
- \_\_\_\_\_ (2009b) 『平安鎌倉時代における日本漢音の研究-研究篇-』 汲古書院 pp.86-87
- 佐藤喜代治編(1996) 「常用漢字人名用漢字の漢音吳音對照表」 『漢字百科大事典』 明治書院 pp.410- 448
- 築島裕(1967) 『興福寺本大慈恩寺三藏法師伝古点の国語学的研究』 東京大学出版会 pp.157-159
- 藤堂明保(1957) 『中国語音韻論』 江南書院 p.236
- 中沢信幸(2000) 「漢和辭典の字音について」 『名古屋大学人文科学研究』 29 名古屋大学大学院文学研究科 pp.19-33
- 沼本克明(1982) 『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』 武蔵野書院 pp.850-895
- \_\_\_\_\_ (1995) 「觀智院本類聚名義抄和音分韻表」 『日本漢字音史論輯』 築島裕<編>汲古書院 pp.128-129, pp.167-170
- \_\_\_\_\_ (1997) 「宋音唐音 統合分紐分韻表」 『日本漢字音の歴史的研究』 汲古書院 p.555, pp.599-604
- \_\_\_\_\_ (2014) 『字音仮名遣いを論ず』 汲古書院 pp.281-288
- 平山久雄(1967) 「中古漢語の音韻」 『中国化叢書1 言語』 大修館書店 p.156
- 湯沢質幸(1987) 『唐音の研究』 勉学社 pp.107-129

- 董同龢(1972) 『漢語音韻學』 學生書房, 孔在錫譯(汎學圖書) pp.248-252
- 李方桂(1980) 『上古音研究』 商務印書館 p.72
- 鄭張尚芳(2003) 『上古音系』 上海教育出版社 p.249
- E. G. Pulleyblank(1984) *Middle Chinese*, A study in historical phonology, University of British Columbia Press, pp.113-121, p.235
- Günther Wenck(1957) *Japanische Phonetik*, Otto Harrassowitz Wiesbaden, pp.343-354
- W. South Coblin(1983) *A Handbook of Eastern Han Sound Glosses*, The Chinese University Press, p.122

## 〈요지〉

## 漢和辭典 江・宕攝韻 字音規定의 문제점

본고에서는 新常用漢字表에서 江・宕攝韻에 속하는 漢字에 대해 漢和辭典 6종을 대상으로 그 字音規定에 대해 고찰하였다. 그 결과 나타난 문제점을 정리하면 다음과 같다.

1)開口2等 江韻은 오음에서 -au/-aku형과 -ou/-oku형이 혼재하는데, 이로 인해 많은 한화사전에서 오음형에 오류가 보이며, 또한 -ou/-oku형을 慣用音으로 규정한 경우도 보인다. 따라서 江韻의 오음형은 고문헌을 통해 일일이 그 字音形을 확인할 필요가 있으며, 또한 -ou/-oku형은 慣用音에서 제외해야 한다.

2)開口1等 唐韻은 오음한음 모두 -au/-aku형으로 출현하는데, 일부 사전에서 오음을 -jau/-jaku형으로 기재하는 오류가 보인다.

3)開口3等 陽韻 을류는 오음에서는 -au/-aku형으로, 한음에서는 -jau/-jaku형으로 출현하는데, 齒音字의 경우, 일본어 ㄱ行子音의 口蓋性으로 인해 한음이건 오음이건 -au/-aku형과 -jau/-jaku형이 혼재한다. 이에 따른 자음규정의 어려움으로 인해 많은 사전에서 그 치음자의 자음형에 오류가 보인다. 치음자 중에서 濁字인 경우에는 그 聲母의 반영을 통해 오음한음을 구별할 수 있으며, 그 밖에는 현재까지 남아 있는 자음형을 오음한음 동형으로 규정하면 될 것이다. 현재 그 자음형이 남아 있지 않은 경우에는 牙喉音字와 같이, 오음은 -au/-aku형으로, 한음은 -jau/-jaku형으로 규정하면 될 것이다. 이것은 陽韻 各류의 경우에도 동일하게 적용할 수 있을 것이다.

4)開口3等 陽韻 各류는 오음한음 모두 -jau/-jaku형으로 출현하지만, ナ・ラ・サ・ザ行에서는 直音形인 -au/-aku형으로 출현하는 경우가 있다. 이 直音形은 拗音이 일본어 音素로서 정착하기 이전의 字音形이며 오래된 자료를 중심으로 출현하므로 오음으로 규정해야 할 것이다. 즉 開口3等 陽韻 各류는 오음한음 모두 -jau/-jaku형으로 규정하면 되며, 현재까지 -au/-aku형으로 남아 있는 자음형만을 오음으로 규정하면 된다고 할 수 있다.

5)開口3等 陽韻 各류는 한음에서는 -wijau/-wijaku형으로, 오음에서는 -wau/-waku형으로 출현한다. 그러나 모든 사전에서 한음의 古形을 -jau/-jaku형으로 기재하고 있으며, 또한 오음의 古形을 습기성을 생략한 -au/-aku형으로 기재하고 있는 경우도 발견된다.

논문분야 : 음운론

키워드 : 한화사전, 한음, 오음, 강섭, 탕섭

■ 백혜영 (白惠英)

동국대학교 박사 수료  
oistrakh1218@naver.com

■ 이경철 (李京哲)

동국대학교 교수  
kanjieee@naver.com

- 投稿日 : 2016년 9월 30일
- 審査開始 : 2016년 10월 15일
- 審査完了 : 2016년 11월 12일
- 掲載確定 : 2016년 11월 13일